
アダプター・ソケット・セクサス六号

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アダプター・ソケット・セクサス六号

【Nコード】

N6597V

【作者名】

りきてつくす

【あらすじ】

結婚十年目にして倦怠期を迎えた私と妻は、アダルトグッズの通信販売で”セクサス”なるものを購入した。男性機能補助器具という名称からおよそどんな商品かの見当はつけていたのだが、送られてきたのは……。【空想科学祭2011参加作品です】

【 1 】 (前書き)

この作品は「空想科学祭2011」BLUE部門に参加しております。

い、いちおうSF小説のつもりです……。

あと15禁作品ですので、良い子のみなさんは読んじゃダメだお。
でわでわ。

大恋愛の果てに駆け落ち同然で結婚した妻との夫婦生活も、かれこれ十年目を過ぎたあたりから世間一般で言うところの倦怠期というやつにさしかかったらしい。付き合いはじめたころ胸に抱いていたとろりと身もとろけるような恋慕の情は、自動車のタイヤがすり減ってゆくように日々の暮らしに削り取られ、後には諦念とでもいうべき倦んだ心だけが残った。お互いに相手のことを魅力的な異性だと感じなくなり、会話も極端に減り、今では相手がそばにいるだけで空気さえも薄くなった気がして、どうにも息が詰まる。

妻との間にはまだ子が無かったため、月に一回くらいは半ば義務的に、機械的に宗教の儀式めいたセックスをしないこともないが、はつきり言って体力を摩耗するだけで全く快感を得られないし、ある意味苦痛ですらある。それでも離婚を考えないのは、お互いのことを必要不可欠な仕事のパートナーだと認識しているせいだろう。私は文筆を生業としていて、一方の妻は絵描きである。二人合わせて絵本作家としてのペンネームを持ち、有り難いことにその名前はそこそこ世間に知られていた。ただあくまでも二人一組であって、私には独立した作家として食べてゆく自信はないし、どうやらそれは妻も同じのようである。

そんな悶々とした日々を送っていた、とある日曜の午後、リビングのソファアヘだらしく身をあずけ買ったばかりの文芸誌を繰っている、ダージリンティを二つトレイに乗せて妻がやって来た。私の横へ腰をおろし、ねえ、と甘えた声を出す。

はてさて、今日は月に一度のセックスをする日だったろうか……などと、まるで掃除当番を押しつけられた小学生みたいにやるせない心境のため息をついていると、彼女は私に向かって総ページ数が二十ページほどのカラー刷りのカタログを差し出した。

「ちょっとこれ見て欲しいんだけど……」

「おや、なんですか 家具でも新調したいのですか？」

「違うのよ、お隣の大河内さんの奥さんから借りてきたの。アダルトグッズの通信販売用カタログなんですよ」

「アダルトグッズ？」

私はいぶかしみながらも、そのカタログを手に取って眺めた。表紙には「あくなき性への欲望を科学する」と、なにやら胡散臭いキヤッチコピーが銘打ってある。

「ほほう、お隣の大河内さんが……これをねえ」

隣家の豪邸に二人きりで暮らしているという大河内家の、ブルドッグとコビトカバを足して二で割ったようなもの凄い容貌の奥さんと、有名妖怪漫画家が描く老人のお化けそっくりのご主人を思い浮かべ、その二人がアダルトグッズを使用して夜な夜な秘事に耽っている様を想像して、私はぶるつと身震いした。マニキュアの塗られた指先でティーカップを持ち上げながら、妻が言う。

「……あの奥さん、妊娠八ヶ月なんですよ」

「ええっ、そうなのかい？ ぜんぜん気づかなかったなあ」

ゆづに成人二人分の目方を有するという肥満体の奥さんである。今さらその目方に、胎児の一人や二人や三人や四人、追加されても見た目にさほど変化が生じないのは当然のことと言えよう。それにしてもあの小男のご主人は、いったいどうやって巨漢の妻を抱くのだ……、なにやら妖怪同士の格闘じみた春画の構図を思い浮かべて顔をしかめていると、妻がため息まじりに言った。

「結婚十五年目にして、ようやくと授かった赤ちゃんなんですよ、いいわねえ……」

最近とみに目尻のあたりの小じわが目立ちはじめた妻が、気のせいだろうか若干非難のこもった目で私を見上げる。将来自分の生んだ子供に自らが描いた絵本を読んで聞かせるというのが彼女の夢である。そのため結婚して十年を過ぎた今でも不妊治療のためせっせと専門のクリニックへ通う努力を怠らない。一方の私はいえ、

造精機能障害などの検査を一通りやり終えたほかは、とりわけ子供を作るための努力などしていなかった。せめてセックスの回数でも増やせば良いのだろうが、最近ではその意欲を奮い立たせるだけでも相当なエネルギーを要し、また若干心臓に持病のあるせいでバイアグラなどは怖くて使用できず、どうやら妻は私のそのような消極的態度をずっと不満に思っていたふしがあるのだ。

「ほんと、羨ましいいわねえ……」

これはいかん、妻のテンションが下がりはじめている。

某菓子メーカーとのタイアップで出版される予定の絵本の締め切りがもう間近に迫っているのだ。妻は気分屋で、調子の良いときには一夜にして何枚もの絵を仕上げるが、いざ気乗りしないとなると創作に対するモチベーションの低下いちじるしく、作業がまったくはかどらない。おかげで過去に数度、締め切りぎりぎりになっても原稿が上がらず、出版社からのクレームと妻のヒステリーの板挟みになった苦い経験がある。ここは取りあえず真剣に話を聞くふりをして、なんとかこの場を穩便にやり過ぎさなければ……。

「どれどれ」

妻がへそを曲げぬよう、さして興味もわからないアダルトグッズのカタログをばらばらめくってみせる。すると彼女は、これよこれよ、と言っているページを指さし、鼻息を荒くした。

「お隣の奥さんが、これを使ったんですって。そうしたら夜の生活が一変して……」

男性機能補助器具アダプター・ソケット ”セクサス”

またえらく俗物的な名前だが、肝心の商品の写真がどこにも掲載されていない。代わりに某大学教授のなかば自画自賛めいた開発秘話があんえん綴られている。もちろんそんなものにさしたる興味もわかないので適当に読み飛ばしたうえで、ほう、と相づちだけ打っておいた。男性機能補助器具などという名称からして、どんな商品なのかおおよその察しはつくのだ。おそらく江戸時代で言うところの肥後芋茎みたいなものだろう。

ケーキ屋のショーウィンドウを覗き込む少女の目をして、妻が言った。

「ねえ、あなた、うちもこれが欲しいなあ」

アダルトグッズなどというものは、往々にしてテレビショッピングで衝動買いた健康器具と同じ末路をたどる。物珍しさから数回使用されはしたものの、すぐに飽きられ押し入れのなかへ放り込まれる運命にあるのだ。ムダ遣いと言えばそれまでだが、しかし今ここで妻を不機嫌にさせるわけにはいかない。まあ仕事を円滑に進めるうえで必要経費だと考えるしかないだろう。

「いいんじゃないか。君がそんなに試してみたいと言うのなら購入してみれば……」

「まあ嬉しい。じゃあ、さっそくインターネットでリース契約を申し込んでくるわね」

私の手からカタログをつかみ取ると、妻はいそいそとパソコンのある仕事部屋へ姿を消した。リース契約だって……？ いったいその商品はいくらするものなんだ。しかし今さら値段を訊くのも気が引けるし、そもそも喜んでいる妻に向かって高いからやっぱり止せとは言えない。まあ大人のオモチャというくらいだからしよせん玩具の域を出ないだろう、とムリヤリ自分を納得させ、それ以上は深く考えないことにした。

それから一週間後の日曜日。契約した商品がいよいよ配達されてくる日である。

その日、妻は朝からそわそわして床の間に花を活けたり寝室のベツドカバーを一新したりと終始落ち着かない様子でいたが、しまいには美容院へ行くと言って家を出たきり戻らなかった。おかげで私はせっかくの休日だというのに心身の休まる気がせず、やたらタバコばかりふかしては、今か今かと商品の到着を待ちわびていた。

夕方近くになってようやくドアチャイムが鳴り、私は読みかけの夕刊を放り出して立ち上がった。ちなみに妻はまだ戻っていない。

「はあい、今行きますよ」

商品が商品なだけに絶対中身が分からないよう梱包されているはずだが、それでも妙な気恥ずかしさと後ろめたさがあって、私はわざと不機嫌な声で返事をした。印鑑を手に玄関ドアを開ける。すると予想に反して、そこに立っていたのは宅配業者のひとではなく、十五、六才くらいの少年だった。

なんだ荷物が届いたんじゃないのか。

少し拍子抜けしたが、それと同時に少年のあまりの美しさに目を奪われた。髪型や服装でかろうじて性別を判断できるが、じつは少女だと言われても疑いようのないくらい可憐で美しい顔立ちをしていたのである。

「……や、やあ、うちになんの用かね？」

少しどきまぎししながらそう訊ねると、彼は丁寧におじぎをしながらこう言った。

「このたびはご注文くださり、まことにありがとうございます。わたくし、セクスス六号と申します」

私の手から印鑑がすべり落ち、ころころと玄関の三和土を転がった。

折しも沈みかける夕日が雲の片鱗を赤く染めながら、後光のように射し込んで少年のたたずむシルエツトをくつきりと浮かび上がらせていた。私はといえば、ただ阿呆のように口をぽかんと開けたまま、その神々しい姿をいつまでも眺めていた……。

セクスス六号は、どう見ても人間の少年としか思えなかった。

背は高くもなく低くもなく、色白できめ細かい肌をしていて、髪はさらさらのダークブラウン、切れ長の瞳はあくまでも涼しげに、長いまつ毛はくるんとカールして、肉感的な唇もなまめかしく、笑うと真っ白い糸切り歯がのぞいた。その姿は見る者を否が応でも扇情的な気分させた。なにより全身から発せられる抗い難いほど淫靡なフェロモンが、これでもかというほど私の劣情をそそった。

美容院へ行ったついでにエステサロンへも寄りリンパマッサージと顔面蜂蜜パックをしてきたという妻が、不自然に顔をテカらせながら、そんなセクスス六号を見つめてうっとり表情をゆるめた。

「ほんと、お隣の奥さんが言った通り、美少年ねえ……」

「お、お前、こういうことはだね、事前にちゃんと説明しておいてくれないと困るじゃないか。だいいちこれは本当に機械なのか？

じつは人間の少年が化けてるってことはないだろうね？ もしそうだとしたら、これは犯罪だぞ……」

「あら、なにもご存知ないんだから、このセクススは、現代ロボットの工学の粋を集めて造られた慰安用アンドロイドの傑作なのよ。今まさに全国の熟年夫婦のあいだでブームに火が付いてるっていうのに……」

セクスス六号は、すでに全裸になってベッドに腰掛け、こちらへ向けてとろけるような笑みを浮かべていた。私たち夫婦もすでに入浴を済ませ、バスローブ一枚だけの姿となっている。空調をうんと効かせているせいで室温は快適だが、しかし私は別な意味合いでじつとりと重たい汗をかいていた。これからいつたいなにが始まるのか……。いや、ナニが始まるのだが。

よくルネッサンス絵画などの題材として描かれる奏楽天使よろし

く、無邪気な笑顔の裏側にひっそりと魔性を忍ばせながら、セクサス六号は私と妻を交互に見て甘ったるい声を出した。

「ふふ、どうやら準備は整ったみたいですね。じゃあ、ぼちぼち始めましょうか。これから私の使用方法をご説明いたしますのでよく聞いてくださいね」

そう言うつと彼は、いきなりベッドの上で四つん這いになり、可愛い、丸みのある尻をぐつと突き出してきた。

「お、おい、君……」

うろたえる私に向かって、彼はこともなげに言つてのけた。

「まずは私の凹型ソケットに、ご主人の凸部を挿入していただきませう」

うっ、と言葉に詰まる。

もしかしたら、そういうことになるんじゃないかという予感があったが、その行為があまりにも反道徳的であるがゆえに、あえて考えないふりをしていた。しかし目の前の少年は、あたかもOA機器の扱いかたをレクチャーするような気楽さで、その神をも恐れぬ行為を平然とつなぐのである。

私は生唾を飲み込もうとして果たせず、乾いた喉をけくつと鳴らしてうめいた。

「きつ、君は凹型ソケットなどと言うが、要するにそれは、あれだろう、けつきよく、つまるところ、世間一般で言う、しりのあ……」

「私たちセクサスに消化器官は存在しません。したがってこれは単なるソケット、ご主人の凸部の生体データをスキヤニングするためのパーツでしかないのです」

「しかしだねえ、君……」

「ご安心ください、内部は完全除菌されておりますので感染症などの心配はありません。さらに円滑な挿入をうながすため絶えず弱酸性の潤滑液を循環させておりますので、ご主人の凸部に物理的なダメージを与えるようなこともございません。安心してご挿入ください」

私は、おそろおそろ妻の様子をうかがった。彼女はすでに欲情の虜となり目をうるうる潤ませていたが、私の情けない表情に気づくと、あなた男でしよう、さっさと覚悟を決めなさい、と言わんばかりにまなじりをきりりと吊り上げた。仕方なく、ふたたびセクサス六号のほうを見やる。彼の凹型ソケットは、今や私を誘い込まんとしてヒクヒクと蠢いていた。

「むむんっ」

私の深層心理で、なにやら邪悪な精神がぬつとカマ首をもたげるのを感じた。

背德的であるがゆえに刺激的、いけないと禁じられている行為ほど、やってみたくなるものだ。この欲求にあらがうことは、たとえいい年をした大人であっても並大抵のことではない。禁断の果実は美味しいのである。

さらに言うならば、セクサス六号は単なる機械、ちよつと凝った造りにはなっているがしょせんアダルトグッズにすぎない。ゆえにこれからしようとしていることは、破廉恥極まりない行為ではあるけれど、けっして違法ではないのである。もし見つかっても警察に捕まる心配はないのである。大丈夫なのである。ははは、どうってことないさ、だって江戸時代でいうところの肥後芋茎みたいなものじゃないか……。

そう自分に言い聞かせ、セクサス六号の細い腰へ腕をまわしぐつと自分のほうへ引き寄せた。すでに私の凸部は、発射台へ据えられたスペースシャツルのごとくいきり立っていた。自分はこれから公序良俗に鑑みてすぐいけないうことをしようとしている、そんな背徳感が、逆に私を性的な興奮へと駆り立てているようだ。ようし、やってやるうじゃないか。地球は青かったと言ったのはガガーリン少佐だが、私はあえてこう言い換えることにしよう。少年の蒙古斑は青かった。

怒張した凸部の先端をセクサス六号のソケット入り口へあてがうと、大腿四頭筋に力をこめて一気にインサートした。

「あん」

艶やかに光る彼のピンク色の唇から、切ない喘ぎ声が漏れる。

「き、君ってやつは……、機械のくせに感じているのかね？」

「いえ、ソケット内部に圧力を感知すると、自然に声が出るようプログラムされているのです」

「うむむ、それにしても……」

ソケット内部は、キツくもなくユルくもなく、ちょうど良い加減で私を締め付けてくる。しかもどういうわけかウネウネと蠢くような感触が、先端から根元までをまんべんなく行ったり来たりしているのだ。はつきり言って、ものすごく気持ちが良い。

「今ご主人の凸部における、形状、硬度、におい、温度、脈の打つ早さなどをスキヤニングしておりますので、そのままの状態でしたらくお待ちください」

「ぬおおつ、このまま待てというのか」

快楽に身を委ねていると勢いで果ててしまいそうになるので、仕方なく私はダンテの「神曲」の一節などを頭のなかで反芻して精神の均衡を保とうとした。ところがあまりの気持ち良さに脳内の言語中枢が混乱をきたし、しまいには願人坊主の「でろれん祭文」のようになつてしまっていた。

地獄の王の旗ひらり

地獄の沙汰も金次第

でろれん でろれん でんでろれん

あっそれ、でろれん でろれん 地獄編

闇、我が半球を包むとき

皮、我が陰茎を包みたり

でろれん でろれん でんでろれん

あっそれ、でろれん でろれん 地獄編

地獄煉獄 それなあに

天国極楽 それなあに

私とあなたが通じあう

アソコとアソコで感じあう

でろれん でろれん でんでろれん

あつそれ、でろれん でろれん 地獄編……

などと、うわ言のようにつぶやいて、けけけつと意味不明の笑いをもらしていると、セクスス六号はおもむろに顔を上げ、こちらを興味津々食い入るよう見つめている妻に向かって告げた。

「ただいまスキャンが完了いたしましたので、これよりそのデータを元に、若干のアレンジを加えて、私の凸型ソケットを再構築いたします」

彼が膝立ちの姿勢になると、その股間からなにやら卑猥な形状をしたものがむく、むく、と起き上がってきた。ナニである。古代インドにおいては釈迦の修行を妨げようとした欲界第六天の魔王、マール。国内においては川崎市の金山神社で古くから祭祀されているというご神体、かなまら神。俗称、おちんちん。

「あらまあ、あらまあ……どうしましょ」

それを見て妻は身をよじり、ほうつと熱い吐息をもらした。

「……こんなに立派になっちゃって」

「ご主人が分泌された体液はそのまま私の内部できれいに濾過され、不純物や雑菌などを除去したうえで、あらためて奥さんの体内へ注入されます」

「ほんと、頼もしいわあ……」

私と下半身がつながったままの状態で、セクスス六号が言った。

「では奥さん、そろそろ始めましょうか」

そして、目をきらきら輝かせている妻へ膝立ちの姿勢のままにじり寄ると、この男性機能補助器具は慣れた手つきでバスローブをはぎ取り、ゆっくりとベッドの上へ押し倒したのである……。

妻の目論んだとおり、その日から私たち夫婦の夜の生活は一変した。

かつては赤ちゃんを得たいがための純粋な生殖行為として月一回のみ行われていたセックスが、今では夫婦そろっての秘めやかな享樂となり、より積極的に、かつ破廉恥に、理性などかなぐり捨てたそれはもう浅ましい姿となって毎晩のごとくに繰り広げられたのである。

おかげで私は、文壇仲間との交流にかこつけたバーやキャバレー通いをしなくなつたし、妻も、あれほど頻繁に行っていた知り合いの画家たちとの小旅行をぱったりと止めた。そしてまるで結婚したての若いカップルのように夜ごと心を弾ませながら、胸をときめかせながら、セクサス六号を交えての性の営みに身をゆだねていったのである……。

ところが、そんな享樂的な日々が一年も続いたある日のこと、妻がまたぞろ不満を言い始めた。

「最近、あの子ったらアソコの具合が良くないのよ、なんて言うか、芯がないっていうか、張りが無いの、そうねえ、大きさも一回りほど小さくなつた気がするわ、射精だつて勢いがないし……。なんかもう雄々しさの欠片も感じられなくて、おかげで私ちつとも気持ち良くなれないわ」

どうやらセクサス六号の凸型ソケットの調子があまり良くないようである。かくいう私も、凹型ソケットの締まり具合に少なからず不満を覚え始めていた。

「ここんどこ、なんかユルいんだよなあ、あいつ……」

「あら、なに言ってるの、あなたがまず燃えてくれなくちゃ困るじ

やない。あの子は、あなたの興奮する度合いを読み取って、それを自身の凸型ソケットへも反映させているんだから」

「うーむ……、ちょっと酷使しすぎたか」

妻のコンディションが悪いとき以外は、ほとんど毎日のようにセクサスを使用している。彼のソケット部位を形成する人工筋肉は有機化合物で出来ているらしいから、あまり頻繁に使うと筋肉繊維が伸びてしまうのかもしれない。

「一度、メーカーのほうへ問い合わせてみるか」

「そうね、できれば新しいものと交換してもらいましょう」

ダブルベッドの中央で仰向けのまま機能を停止させているセクサス六号の寝顔を眺めて、妻が小さくため息をついた。充電中は目を閉じたまま、マネキン人形のようにぴくりとも動かない。もちろん寝息なども立てない。彼の首の後ろ、延髄のあたりから伸びた電源コードの先端は、ベッドサイドにある家庭用コンセントへと差し込まれている。基本的にバッテリーの電力のみで動くセクサスは、一日の大半をこうして充電しながら過ごすのだ。

「……なんかこうしてあらためて見ると、けっこう不気味ね」

「そうだな、さながら棺桶のなかで眠る吸血鬼ドラキュラってところか」

さっそくりス契約書に記載されているサポートセンターへ電話をかけてみた。すぐに若い女性の声が応じた。

「はい、アダプター・ソケット・セクサス、サポートセンターの浜崎がお受けいたします」

「じつは最近、うちで使用しているセクサスの調子があまり良くないのだがね」

「どういった症状でしょうか?」

「ええと……」

一瞬、言葉に詰まった。

「ははは、どう表現したらいいのかねえ、つまりその、なんだ」

まさか若い女性相手に「アソコがユルい」などとも言えない。ど

う説明したものと考えあぐねていると、向こうでもそれを察してくれたようで技術開発部というところへ電話を回してくれた。応対に出たのはやたら陰気な声でしゃべる男だった。私がセクサスの使い心地に関する不満をぶつけると、彼は慇懃無礼な口調でこう切り返してきた。

「あいにくですが、それは故障ではなく経年劣化というものではないでしょうか。だとしますと残念ながら修理や交換の対象にはなりません」

「そんな馬鹿な」

「いえ、このことはリース契約書にもちゃんと明記されているのです」

私は食い下がった。

「し、しかしだねえ君、現代工学の粋を集めて造ったというアンドロイドがだよ、たった一年足らずの使用でアソコがユルユルになったんじゃ、これはもう商品として欠陥があるとしたか言えんのじゃないかね」

すると男はいったん口ごもり、それから急に早口でたたみかけるように喋り始めた。

「よろしいですか、すでにご承知のこととは思いますが、セクサスは動きをより人間に近づけるため上皮はもちろんのこと筋繊維にも有機化合物を使用しております。この人工筋繊維は、我が国の産業技術総合研究所と理化学研究所が、有機合成化学の世界的権威でもありますカリフォルニア工科大学のバルトリン・キンスキー教授との共同開発によって生み出したもので、人間の骨格筋における酸素結合性タンパク質と極めて似た働きをする疑似筋肉、すなわちこの有機化合物の組成はグルコサミノグリガンのそれに近似しているのですが、その細胞骨格内におけるグアニンヌクレオチド結合タンパク質の受容体への結合エネルギーをコンピュータ制御することによって、マイクロフィラメントによる細胞外マトリックスとの細胞増殖因子を便宜的に初期化して、分裂促進因子活性化タンパク質キナ

ーゼによって引き起こされるアポトーシスがナニをナニしてナニする……」

黙って聞いていると頭痛がしてきそうだったので、慌てて押しとどめた。

「ちよつと待ってくれ、私は根っからの文系人間だから、そんな専門的な用語を早口でまくし立てられても理解できない。ようするにあれだろう、君が言いたいのは、セクサスも人間の女と一緒に、やりすぎるとガバガバになるって話だろう？」

「まあ、多少表現に問題はありますが、おおむねそういった意味です」

「だったらリースをいったん解約して、新たに組み直せばいいだけの話じゃないか」

「いいえ、それでは契約違反になってしまいます。お客様のリース期間が満了するまでには、あと二年と少々あります」

「だから、そこをなんとか……」

「もし中途解約なされますと莫大な違約金が発生しますが、それでもよろしいですか？」

「うっ」

確かにセクサスのリースは三年契約で、途中で解約すると違約金が発生することは契約書の条項にもうたわれている。向こうがあくまで契約書を盾に取って新品との交換を拒むなら、こちらとしてはもうどうしようもない。私は絶望的な気分を抱きつつも、しかし表面上ではつとめて平静を装いながら言った。

「じゃあ君はなにかね？ 私たち夫婦に、あと二年ものあいだアソコのユルいセクサスを我慢して使い続けると、こう言いたいのかね？」

「結果として、そういうことになります」

口調はあくまでも丁寧だが、明らかにひとをバカにしている。私は、つかつかとなり怒りにまかせて電話を切ろうとした。

「もういい！ 消費者センターへ苦情を言ってやる」

「まあ、しばらくお待ちを」

別に慌てるふうでもなく、男が引き止めた。

「製品のお取り替えは出来かねますが、ただこういう状況を考慮して当社では専用のアタッチメントを用意してございます」

「アタッチメントだと？」

「そうです。もちろんアタッチメントのご利用に際しては付帯契約を結んでいただく必要がありますが、この専用アタッチメントを使用することによって、お客様にもう一度新品のときと同様の、理想的かつ刺激的な使い心地が得られますことをお約束いたします」

「うっむ……」

このうえ追加料金が発生するのかもしれないと思うとウンザリしたが、しかしこれまで毎晩のようにむさぼってきた性的快楽が骨の髄まで染み込んでいる私としては、もう選択の余地などなかった。ここは少々お金がかかっても仕方あるまい。私は、不承不承ながらも男の提案を飲むことに決めた。

「じゃあ、そのアタッチメントとやらを大至急こちらへ送ってくださいませ」

「かしこまりました。毎度のご利用ありがとうございます」

電話を切る瞬間、受話器の向こうで、いつひっひ、という男の忍び笑いを聞いた気がしたが、あえて深く考えないようにした。

それから数日経ったある日のこと、うちの玄関先に新たに美少年が二人立った。

「はじめまして、アタッチメント十七号です」

「同じく二十八号と申します」

果たせるかな。

外出から戻った妻は、寢室のダブルベッドに仲良くならんで腰掛ける少年たちを見てあんのじょう騒ぎ出した。

「ちよつとあなた、これはいったいどういふことなの？」

欲求不満のせいか、近ごろえらく機嫌が悪い。

「文殊の知恵じゃあるまいし、セクサスばかり三人いてもしょうがないでしょう、一人だけ残してあとは返品してちょうだい」

「いや、右端にいる子と真ん中の子は、セクサス専用のアタッチメントなんだがね……」

「なにバカなこと言ってるのよっ」

「本当だつてば、嘘だと思つたら彼らに訊いてごらんよ」

すると右端に座るアタッチメント十七号が、邪気のない子どもっぽい笑みを浮かべて言った。

「ご主人のおっしゃる通り、僕とここにいる二十八号はセクサス専用のアタッチメントなんです」

隣りに座る二十八号もその後を受けて言った。

「つきましては今夜からセクサスを使用する際には僕たちも一緒にさせていただきますので、奥さん、どうぞよろしくお願いしますね」

「あらそんなこと……」

少年たちの笑顔にすっかり毒気を抜かれた妻はたちまち考えを改めたらしく、うってかわって優しい声になった。

「こちらこそよろしくね」

やがて少年たちはベッドから腰を浮かせると、めいめいの上着のボタンを外し始めた。真っ白いシルクのブラウスから腕を抜きながら、アタッチメント十七号が言った。

「では早速ですが、これより僕たちの使用方法をご説明させていた

だきます」

「おいおい待つてくれよ、私たちはまだ夕飯を食べてないし、それに見てみる、空だつてまだこんなに明るいな」

プランターの並べられた寝室の出窓からは初夏の鋭い西日が斜めに差し込んで、反対側の壁やフロアリングをきれいなオレンジ色に染め上げている。サイドテーブルのわきに置かれた目覚まし時計は、午後五時から十分ほど過ぎたあたりを指していた。日が暮れるまでには、あと一時間以上もある。

「そう慌てるなつて、君たちだつて今着いたばかりで疲れているんだらう？」

「いえ、僕たちアンドロイドは疲労することを知りません。それに工場から出荷されるときにちゃんと充電も済ませてありますので心配なく」

いつの間にか上半身裸になつた彼らが今度はジーンズを脱ぎにかつたので、私は悲鳴をあげた。

「ちょ、ちょっと待つてくれないか、君たちは若いから平気かもしれないが、私はここんとこ働きづめでもうへとへとなんだ。たのむから夜になるまで待つてくれ」

すると泣きごとを言う私をしり目に、妻がスリッパをぱたぱた鳴らして廊下の向こうへ駆け出していった。すぐに玄関のほうから、がちゃりとドアを施錠する音が聞えてくる。ついでに居間へも寄つて留守電のスイッチを入れてきたようで、鼻歌まじりに駆け戻つてくるなり、今度はいそいそ寝室のカーテンを引き始めた。

「お、おい、なにをしている？」

「決まつてるじゃない、この子たちの説明を聞くのよ」

「君までそんなことを言うのか」

「なによ、夕飯なんて後で宅配ピザでも頼めばいいじゃない。私、あの子たちがどういふふうにセックスしようとしているのか興味があるの」

そして妻はそつと耳打ちしてきた。

「……乱交パーティーみたいなことでも、するのかしらね。うふふ」
もはや欲情で目がきらきら輝いている。こりやダメだ、女という生き物はこれだから始末に負えない。空腹と絶望感にさいなまれながら、私は足を引きずるようにしてキッチンへ行き冷蔵庫にあったママシドリンクを二本立て続けに飲んだ。ついでに生卵と青汁をシイクして一気飲みし、最後に高血圧の薬をばりばり噛み砕いて戸棚にあったブランデーと一緒に喉へ流し込んだ。しばらくしてメリーゴーランドのごとくに周囲の景色がゆっくりと回転し始め、ついでに頭の中でラヴェルの「ボレロ」が勇壮に奏でられた。どうやら胃の中でママシドリンクと、生卵と、青汁と、ブランデーと、高血圧の薬が化学変化でも起こしたらしい。しだいに全身が強い倦怠感に襲われ、同時になんだか得体の知れない多幸福感が心の中を満たしてゆく。全てのことともうどうでもよくなり、私は無意識のうちに心の中でこう叫んでいた。

「らりほー」。

ふらふらしながら寝室へ戻ってみると少年たちはすでに全裸になつてベッドのそこかしこで寝そべり、妻も少し離れた場所でブラジヤアのホットクを外しかかっていた。私は裸になるのが億劫になり、上着は脱がずに穿いていたズボンだけをトランクスごと膝までずり下げた。

「さあ準備はできたぞ、どこからでもかかってきなさい」

酔いも手伝つてなけば投げやりに言つと、アタツチメント十七号がシーツの上をすべるように這つて来て、私にくるんと尻を向けた。「ではまず最初に、ご主人のモノを僕の凹型ソケットヘインサートしてください」

正直、使いものになるのか不安だったが、幸いママシドリンクと生卵が効いてきたらしく、少年のむっちりした尻を目にしたとたん私のスペースシャトルはむくむくとその進路を宇宙へ向け始めた。これは男にしか分からないことであるが、疲れきっているときほどアソコは元気になるものだ。充血してセラミックばりにかちんこち

んになったその先端をソケット入り口へあてがうと、私はニュートン力学の法則に逆らわずそのまま一気に奥まで押し込んだ。

「あん」

アタッチメント十七号が白い喉を反らして少女のような叫びをあげる。と同時に人工括約筋がぎゅうつと収縮して私を根元まで締め上げてくる。電話でメーカーの男が言ったとおり、彼のソケット内部の締め具合は最高だった。さらにスキヤニングされるときいつも味わっていたあのウネウネと蠢くような感触も健在で、これぞまさしくミミズ千匹、なんだかとても嬉しくなり、私はさかった犬みたいにかつくん、かつくん腰を振り始めた。

「あつ、ダメですつ、まだ動いてはダメです。これより僕とセクサス六号のソケットをドッキングさせねばならないのです」

「なにっ、そんな面倒くさいことをするのか？」

「はい、それが僕たちに与えられた使命ですから」

ずいぶんと大げさなことを言うやつだ。仕方がないのでお預けを食らった犬みたいにちんちんしながら待っていると、アタッチメント十七号がセクサス六号の白い背中を抱き寄せて、その尻にぐつと自分の股間を押しつけた。人工皮膚と潤滑剤がこすれ合うにちゃりといういやらしい音がして、セクサス六号がピンク色の唇をきゅつと噛みしめる。

「あん」

ドッキングは成功したようだ。

なるほどアタッチメントとはそういう意味かとそのときになつてようやく気づいた。なんのことはない、ようするに私とセクサス六号のあいだに一人、同じくセクサス六号と妻のあいだにもう一人と、それぞれ少年がサンドイッチになり、五人が団子状に連なって性行為にのぞもうというのである。なんてバカバカしい、狂気の沙汰としか思えない。そのような複雑怪奇な体位でまともなセックスができるはずではないか。

今度はセクサス六号が、アタッチメント二十八号のソケットにお

のれのソケットを突っ込んだ。

「あん」

二十八号のさらさらした髪が跳ね上がり、切なそうなあえぎ声がこぼれる。これでセクサス六号の前後部にそれぞれ専用のアタッチメントが取り付けられたことになる。あとは妻との合体を残すのみ。四つん這いになって今か今かとソケットの進入を待ちわびている彼女の耳もとへ唇を寄せて、アタッチメント二十八号はいたずらっぽく囁いた。

「さあ奥さん、今度はあなたの番ですよ、いいですか、ゆっくり入りますからね」

妻は、激しく身もだえして言った。

「いいわよう、早く来てえ」

やがてベッドがきしみ、妻の「うひいっ」という下品でいやらしい叫びが部屋じゅうに響くと、三人の少年がほっと安堵の息をつくのが聞いた。これでようやくすべてのドッキングが完了したことになる。今やベッドの上では押しくらまんじゅうをするがごとく五人が体をくっ付け合い、ひしめき合っていた。

すべすべしたきれいな背中を私に見せて、アタッチメント十七号が言った。

「これで準備は整いました、あとはご主人のお好きなようになさってください。ちなみにご主人の放った体液は僕のなかできれいに濾過され、セクサス六号へと注がれます」

するとその先にいるセクサス六号も同じように言った。

「その体液はさらに私の中でいいいに濾過され、アタッチメント二十八号へと注がれます」

その先にいる二十八号も負けじと言った。

「その体液はさらに私の中でより念入りに濾過され、最終的には奥さんの体内へ注入されますのでご安心ください」

妻が不安そうに言った。

「ぜんぜん安心できないわ、そんなに何度も濾過したら精子の数が

少なくなつて赤ちゃん出来なくなるんじゃないかしら」

「それはないと思いますが、念のためご主人にも頑張つていただいて性行為の回数を増やすことにしましょう」

「そうね、そうしましょう」

とんでもないことを言うやつらだ。

それにしても電車ごっこか、フオークダンスか、はたまた中国雑技団か、こんなアクロバティックな体位でまともなセックスができるとは思えない。端から見れば、なんと馬鹿げたことをしているのかと呆れ返ることだろう。こんな状態でお好きなようにと言われても困ってしまうが、とにかく団子状態で繋がっているばかりでは埒があかないので、最後尾にいる私がまず一回だけ体を動かしてみることにした。腰をしならせ股間をぐつと前へ押し出す。

たちまち伝言ゲームのように、あえぎ声だけが前方へ流れていった。

「あん」

「あん」

「あん」

「うひい」

やってみると案外面白いものである。

全員がこちらへ背を向けているせいで表情までは窺えないが、今動くのか、いつ動くのかと顔をこわばらせ、固唾を飲んで身構えているのがよく分かる。そんな彼らを快樂へと導く手だてを私だけが握っているのかと思うと、性欲だけでなく征服欲までも満たされてゆくようで実に愉快だ。

ためしにもう一回、今度は少し勢いをつけて腰を動かしてみた。

「あん」

「あん」

「あん」

「うひい」

いや実に楽しい。

フロイトの学説によれば、性衝動が屈折した形で現れるのは人間だけだという。他の動物はみな自分たちの種を保存する本能によってのみセックスを行う。しかし人間の持つリビドーはもつと複雑で、本来生殖こそが唯一の目的であるはずの性的エネルギーのベクトルが、ときには紆余曲折し、あるいは退行し、変貌して、拳げ句にとんでもない姿のモンスターとなつて顕現するのである。

変態的なセックスを行うのは、地球上では人類だけなのだ。

【END】

歴史は繰り返す。

そう予言したのはローマの歴史家であった。なんとこの名の人物だったか記憶にないが、じつに意味深長な言葉である。そう、歴史は時としてくり返されるのだ。人間とは懲りない動物なのである。万物の霊長などと威張っているが学習能力は存外に低いのもかもしれない。

そしてマルクスは、このローマの歴史家の言葉に付け加えて言った。

最初は悲劇、二度目は喜劇。 。
けだし至言である。いやもう本当に……。

新たに二名のアンドロイドを加えたことによって私たち夫婦の性の営みはその難易度を上げるとともに、より刺激的にかつ変態じみていったのだが、しかしその至福の日々は一年と経たないうちに脆くも二度目の破綻を迎えることとなった。

「ねえあなた、最近アタッチメント二十八号の凸型ソケットの具合が良くないんだけど……」

「なんだ君もかい、じつは私もなんだよ。近ごろ十七号の凹型ソケットがどうにもユルく感じられてね」

「あの子たちのアソコって、どうやら一年が使用限度みたいね」

「かもしれないな。それなのに三年契約を結ばせるなんてひどい話だよ、これじゃあまるで詐欺じゃないか」

「ためしに十七号と二十八号のポジションを入れかえてみたが、やはり結果は同じであった。」

「気が進まないけど、もう一度メーカーのほうへクレームを入れてみましようよ」

「そうだな、文句をつけてもムダのような気もするが一応言うだけ
のことは言っておくか」

妻にうながされ、一年前と同じくメーカーのサポートセンターへ
電話をかけてみた。やはり一年前と同じく陰気な声でしゃべる男が
応対に出て、一年前とほぼ同じ歯車の噛み合ないやり取りがなされ、
結果として一年前と同じく我が家に美少年が二人送られてきた。

「こんにちは、アタッチメント専用ハブ三十一号です」

「同じく、専用ハブ五十五号です」

こうなつてくるともう笑い話である。妻が呆れ顔で言った。

「……とうとう五人になっちゃたわ」

「これで念願のバスケットボールチームが組めるじゃないか」

「冗談言ってる場合じゃないのに」

「でも美しい少年たちに囲まれて、君にとってはまさにハーレムじ
やないのかい」

「あら、過ぎたるは及ばざるがごとしって言葉を知らないのかしら」
寝室にある私たちのベッドや鏡台のイスに思い思いの姿で腰掛け
る少年たちを眺めて、妻がため息をついた。

「……美少年って最初は感動するんだけど、そのうちみんな同じ顔
に見えてきちゃってつまらないわ」

「言われてみればなるほど。普遍的な美しさというものは、ある意
味個性を極力排除した上に成り立っているのかもしれないな」

「あと一人増えたら、マンガのおそ松くんみたいでちょっと笑える
わね」

などとバカなことを言い合っているうちに夜である。

漠然と覚悟はしていたものの、実際に二名を加えた計七人でベッ
ドインしてみても私は悲鳴をあげた。

「ひいー、ダメだこりゃ、絶対に無理だ」

私と妻のあいだに少年が五人もいるのである。ベッドで下半身を
ドッキングさせ一列に繋がり合っているのである。念のため配列を
述べておくと、先頭が妻で、その後のアタッチメント専用ハブ五十

五号、アタツチメント二十八号、セクサス六号、アタツチメント十七号、専用八ブ三十一号と続き、そして発車オーライ出発進行、か
くいう私が車掌である。みな膝立ちの姿勢では体のバランスが取り
にくい、それぞれが前にいる者の両肩へ手を添えている。その
姿勢はまるでフォークダンスのジエンカのようにでもある。どう考え
ても定員オーバー、この体勢でのセックスはやはり五人が限度のよ
うだ。

先頭にいる妻が、最後尾にいる私に向かって叫んだ。

「ねえあなた、この状態でセックスするのってちよつと難しいんじ
やない？」

「難しいというよりも不可能だ、もうナンセンスだよ、これじゃ全
くもって身動きが取れない」

お互いの距離が離れているせいで自然と声が大きくなる。

「ねえ、この際だから家を増築しようよ、これじゃ部屋が狭く
て不便だわ」

「バカ言うない、それでなくともこいつらのリース料支払うのにあ
つぷあつぷしてるんだから」

「せめてベッドだけでも大きいのに買い替えましょうよ。このまま
だと先頭にいる私のはじめ出されてしまいそうなの」

大きめのダブルベッドが七人の重みで深く沈み込んでいる。寝室
のなかには少年たちの肌がこすれ合うときに発する甘いにおいがむ
つとする濃度で立ちこめていた。

「取りあえずいったんドッキングを解除しよう。このままでは押す
もならず、引くもならず、全くもって埒があかない」

「そうね、この姿勢でじつとしているのって腰がつかいわ
するところとちょうど真ん中に位置するセクサス六号が言った。

「ご主人、もう止めてしまふのですか？」

「だって仕方ないだろう、こう人数が多くちゃ上手く動けないよ」
少し思案して、彼は言った。

「では、音楽でもかけてみましょうか」

「なに？」

「私の体にはサウンド機能も組み込まれているのです。出力六百ワットのアンプと、四ウェイスピーカーシステム、それにサブウーファ―は二十五センチのものを二基搭載しています。そこから生み出される迫力のサウンドは、まるでコンサートホールにいるような臨場感を我々にもたらし……」

「ちょっと待ってくれよ、今この状況で音楽がなんの役に立つというのだ」

「音楽に身を委ねれば自然と体が動き出します、脊椎動物特有の体性反射というやつですよ」

「バカな、ダンスでも踊らせるつもりか？」

「うふふ、その通り、セックスはある意味ダンスと同じなのです。脳内の海馬が作り出す空間認識を音楽の力によって変貌させるのです。脳シナプスを柔軟にしてニューロン細胞の働きを活性化させるために、三十一号と五十五号のソケット部位から微量の幻覚剤を分泌させておきます。さあ、窮屈な現実を抜け出して素晴らしい幻想の世界に浸るうではありませんか。みなで気持ち良いことしましよ」

「言ってる意味がよく分かんないよ」

「ならば実行するまで、レッツ・ミュージック・スタート！」

突然、セクサス六号の美しい後ろ姿に変化が現れた。めりめりめりつと皮膚の裂ける音がして髪の毛ごと二つに割れた後頭部からセンサースピーカーが、みしみしみしつと裏返った肩甲骨の下からアスピーカーが、べきべきべきつとアジの開きみたいにまつ二つになった背中から巨大なウーファーが出現し、たちまちそこから大音量の音楽が流れ出した。部屋の床をずんずん震わせる。

「うわっ、バカ、そんなに大きな音を出すやつがあるか。近所迷惑だろう」

「さあご主人、奥さん、この音楽に身を委ねてください。そしてみなで素敵なセックスをしましょう」

その音楽は、二拍目と四拍目に強拍を置いたエイトビートで、いわゆるスカと呼ばれるジャンルのものだった。そのなかでもモッズスタイルやパンクロックの流れを取り入れたツートーン・スカというやつで、大変に乗りの良いスピード感あふれる曲である。反射的に体が踊りだしそうになり私は戸惑いを覚えた。

「これは何という曲だ？」

「マッドネスの『イン・ザ・シティ』です」

「……どこかで聞いたことがあるぞ」

男性ボーカルの声が激しくシャウトした。

「シティ！ イン・シティ！」

その叫びが合図のように七人全員が一斉に立ち上がった。そして下半身を繋げたままの窮屈な姿勢で一列に並び、リズムに合わせて軽快にステップを踏みはじめたのである。

まず右足を踏み出し

両手を大きく振って

腰をくいっと突き出す

「あん」「あん」「あん」「あん」「あん」「うひいっ」

今度は左足を前へ

首を横に曲げて

叫ぶ

「シティ！」

最初のうち躊躇いがあった私もだんだん音楽に身を委ねることに慣れてきて、しだいに快感を覚えはじめた。これがじつに気持ち良いのである。ふつうのセックスでは味わうことのない新種の感覚だった。恐らく妻も同じ刺激を感じているのであろう、快感をこらえるため肩が小刻みに震えているのが見てとれる。やがて全員が歩調を合わせ一糸乱れぬ動きを見せるようになるまで、そう長くは掛からなかった。

右足を踏み出し

両手を振って

腰をくいと突き出す

「あん」「あん」「あん」「あん」「あん」「うひいっ」

左足を前へ

首を横に曲げ

叫ぶ

「シテイ！」

狭い寝室内をムカデダンスを踊りながらぐるっと一回りした後、私たちはドアを開けて廊下へと繰り出した。ダンスしながらのセックスは最高だ。みなと動きがズレると合体した部位が外れそうになるため、慌てて腰を押しつける。相手がそれに反応してびくつと震える。その度にソケットがきゅつと締めつけてくる。彼らが分泌する幻覚剤の作用も相まって、私は半ば陶酔しながら夢中でステップを踏みつづけた。

右足を踏み出し

両手を振って

腰をくいと突き出す

「あん」「あん」「あん」「あん」「あん」「うひいっ」

左足を前へ

首を横に曲げて

叫ぶ

「シテイ！」

不意に、ひんやりした夜風が汗ばんだ顔を撫でた。見上げると漆黒の夜空に星が瞬いている。夢中で踊るうち、私たちはいつの間にか外へ出てしまったらしい。ふだんなら裸のまま外を歩くなど考え

られないことだが、今はそんな羞恥心など吹っ飛んでしまっていた。セクサス六号が絞り出す大音量の音楽に反応して、そこらじゅうの家で犬が一斉に遠吠えを始めた。偶然通りかかった仕事帰りのサラリーマンが、驚いて引き返してゆく。どこか後ろのほうで甲高い女性の悲鳴が聞えた。それでも私たちは一列にぴったり身を寄せ合い、下半身を繋げ合って一歩、また一歩とステップを踏み、町内の細道を前進した。

ホンダ、ホンダ、ホンダ、ホンダ

右足を踏み出し

両手を振って

腰をくいと突き出す

「あん」「あん」「あん」「あん」「あん」「うひいっ」

左足を前へ

首を横に曲げて

私たちの歓喜の叫びが夜空に吸い込まれていった。

「シテイ！」

近隣の通報によりパトカーが駆けつけるまでのおよそ十五分を、私たち七人は踊りつづけた。その間、私はのべつまくなし射精を繰り返し、妻も数えきれないほど体を痙攣させ気をいかせた。

警察署へ連れて行かれたときはてっきりブタ箱へ放り込まれるものと覚悟したが、意外にも三十分ほど調書を取らただけであった。解放された。帰りぎわに警察官がこっそり教えてくれたことだが、セクサスの暴走による公然わいせつ事件が全国で頻発しているらしい。うちの町内だけでもこれで三軒目ということである。セクサスの開発には経済産業省と文部科学省から莫大な予算が投じられており、その利権に絡んで大物政治家が裏で暗躍しているという噂があるから、きつと全国で起きた同様の事件を国家権力によって片っ端からもみ消しているに違いない。ともあれ警察の連絡を受けたメー

カーが大急ぎで五体のアンドロイドを回収し、後ほど修理を終えた
一体だけが改めて我が家へ送られてくることになった。

狂乱から一夜明けて。

私は午前中に出版社との打ち合わせを済ませ、駅前のケーキ店で
買ったカスタードプリンの小箱をぶら下げながら家路をたどった。
吹く風がどことなく透き通り、見上げる空が心持ち奥行きを増した
ように感じたら、もう夏も終りである。昼下がりの住宅街を縫って、
つがいのトンボが飛び交っていた。オスとメスとで繋がり合った二
匹のトンボは、見せびらかすように私の鼻先をかすめながら悠悠空
へ舞い上がってゆく。

家に帰ると、庭先で妻が洗濯物を干していた。

彼女は最近見違えるほど綺麗になった。年も十歳くらい若返った
ように感じられる。またよく笑うようにもなった。その笑顔がまぶ
しいくらい素敵に見えた。セクサスが戻って来る日は待ち遠しいが、
しかし正直なところ今ではあれがなくとも私はふつうに妻とセック
スを楽しむ自信がある。

「ただいま」

チェック柄のエプロンを腰に巻いた細い背中にむかって声を掛け
ると、彼女は振り返って真っ白い歯を見せた。そして頬をちよつと
赤くして、はにかみながら私の鼻先へVサインを突きつけてきた。
ちくんと、ある予感が胸につき刺さった。甘酸っぱい思いが込み上
げてくる。もしかして……。

はたして彼女は晴れやかに言ったのだった。

「あなた、出来ちゃったみたい」

終り

あとがき(200文字)

「このような下品でいやらしい小説を空想科学祭に提出して、あなたはSFという極めて文化的価値の高い深遠なるテーマを一体なんと心得ているのでしょうか。そもそもあなたはSFの定義をご存知なのですか？ 言っておきますけど、しょうもないフィクションでも、サイエンスふざけ話でもないのですよ」

そう詰め寄られて、しかし作者は自信たっぷりに答えたのであった。

「それくらい知ってますよ。SFとはすなわち、素敵なファック！」

あとがき(200文字)(後書き)

このようなしょもない話にお付き合いくださり、ありがとうございました。

ホンダシティのCMを知らない若い世代のひとには、最後の部分の意味がよく分からないかと思います。もし興味がありましたらYouTubeで「マッドネス ホンダシティCM」と検索していただければ動画を確認することができますと思います。

こんな作品はけしからんという苦情、罵倒、殺害予告等ありましたら、お手数ですが作者宛のメッセージかまたは企画サイトの感想掲示板のほうへお寄せください。

最後に、空想科学祭2011を企画運営してくださった実行委員会の皆さま、こんな私を企画へ誘ってくださった創作仲間の皆さま、わざわざ足を運び作品に目を通してくださった読者の皆さまに、心をこめてお礼を述べさせていただきます。本当にありがとうございます。またふたたび皆さまとお会いできる日を楽しみにしております。
でわでわ。

2011・8・28 りきてつくす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6597v/>

アダプター・ソケット・セクスス六号

2011年8月29日03時28分発行